

倶進の辞ことば

宇宙はどの様に変化して行くのか、又人間の運命はどういう様に定められているのかに就では、到底我々人間は知ることが出来ない。唯我々は自然に順応していれば良い結果が得られるし、自然に逆うと悪い結果を受けるということを幾千年もの経験で知ることが出来た。昔の人が天に順っているものは栄えるし、天に逆らうものは亡びるといったのもそのことであつた。自然科学者の研究も結局は此の大自然の状態を明にして之に順応することが出来る方法を見出そうとすることに外ならない。近頃自然科学の研究に従事している者がよく「自然科学の力で大自然を征服する」と唱えるものがあるが之は最も馬鹿げた言葉で「よく大自然に順応する」と云い換えられなければならない。

自然科学の或種の方面では稍々纏つた研究の結果が得られようとしてゐる。例えば大きい所では天体の運動、小さい所では分子の内部の模様や原子の構造などに就て一定の想像をすることが出来るようになって来た。然るに自然科学の内でも心理の方面では、之に関係する要素が多数であるため研究に時日が必要となり中々纏まつた結果を出す事が出来ない。従つて此方面の天を少しでも理解し之に順応して行動することは中々の難事である。併し難事であるといつて之をなおざりにして置いたのでは、どんな出来事も起るが儘にして諦めるより外はない。そこで昔王陽明も事に當つては現在持っている知識を最も良く働かして行動すると同時に、平素は絶えず知識を充実啓発すべきことを説いて居た。此知識の啓発と所信の断行とは何れを欠いてもだめである。

我等同胞は皆機根が等しいとは言えず、又教養も同じではないが、此世にあって平和に、且つ正しい生活を送ることは万人の等しく望む所であろう。併し此様な望ましい生活は全く人間全体が協力して初めて出来る処の事である。この世の中には衆愚の意見に従つていたのでは世の中の施設改良は到底行うことが出来ないから少数でも進んだ考を持った人々の定めた方針に衆人が従うのがよいという考がある。之は「民は倚らしむべし知らしむべからず」という主義である。其結果は稍もすると暴力を以て人に臨むことになる。それは此等少数の人々が現在に満足して知識の啓発に努力しない時に必ず起る弊害である。又他の考では大多数の人々が良いと思つた様に衆人が従うことが正当であると主張する。其結果は稍もすると怠惰に流れ廢頽を免れない。それは此等の多数の人々が知識の啓発に努力せぬ時に起る弊害である。此等両方の弊害は其主張の中に既に潜在して居る。「我等勝つてゐるものが衆人を導こう」とか、「吾々多数が満足すればよいではないか」等の考がそれぞれの弊害を招くことは初めから明瞭である。然し若し我々が我々よりも進んでいる人々に倣つて我々の知

識の啓発に努め、又我々が我々よりも遅れている人々に応分の力を貸して其知識の啓発に努め、全員協力して天の理解を大きくし之に順応する様に行動するならば上に叙べた様な弊書は起ることがないであろう。我々の上には我々以上の人々が居り、我々の下には我々以下の人々が居るので、我々以上の人々に倣って俱に進む様に努力し、我々以下の人々を俱に進ませるように誘掖することが我々の努めなければならない所であろう。

此俱進の道は昔の聖人哲人が着実に実行して来たところのものであると言うことが出来る。孔子は幾千人の弟子に其教を垂れると同時に先哲周公に私淑して自己の教養を怠らなかつたし、釈尊は衆生済度の大悲願を立てて自身は多年雪山に籠って修養を怠らなかつた。但し孔子の心、其釈尊の心は遠く求めないでも我々の心の中にあるのであるから其孔子の心、其釈尊のころを以て、前進の人々と俱に進み、後進の人々と俱に進んで、大自然に順応して行くことは吾々の当に願望すべき所ではなからうか。

大正13年9月

柿内三郎 するす

注：此は大正13年9月東京帝国大学内俱進会の幹事からの依頼で学生へ配布するピラとして咄嗟にしたためたものである。